

平安・鎌倉時代における助詞「の」 のアクセントについて

鈴木 豊

一、はじめに

アクセント史研究の進展にともない、助詞のアクセントについても現在までに多くの事実が明らかにされている。付属語である助詞のアクセントは、現代ではその助詞の直前の語によって左右される、文字通りの付属語的なアクセントである。しかし、『日本書紀』声点本、図書寮本『類聚名義抄』など、平安朝末以前の資料では、ほとんどの助詞が固有のアクセントを持っており、直前の語のアクセントによって影響されることがない。たとえば、「が・て・に・は・を」などの助詞は常に高平調(●●)、「ば・と」(引用)などは常に低平調(○○)、「も・ぞ」などは下降調(●○)のアクセントを示す声点が注記されており、例外はごく少数である。そのなかで、助詞「の」のアクセントは平安時代のアクセント資料においても付属語的なアクセントであり、その点で右にあげた他の助詞と区別される。

助詞「の」について、各アクセント型に対する接続の仕方、和語に接続する場合と漢語に接続する場合の違い、そして歴史的な変化についてなど、先行する研究により明らかにされていることも多い。本稿では、これまでの研究では必ずしも明らかにされたとはいえない、○●●、○○●●型などに対して助詞「の」が高く接続したのか、低く接続したのかという問題を中心として考察をおこなう。

二、具体例とその検討

平安・鎌倉時代において、助詞「の」は和語の二拍名詞に対して、一般に次のように接続する。

- 第一類 ●●+
- 第二類 ●○+
- 第三類 ○○+
- 第四類 ○●+

第五類 ○●+○

助詞「の」の二拍名詞各型への接続をみると、第四類を除く他の類では、「の」は接続する語の最終拍と同じ高さで接続している。三拍名詞でも同様に●●●型は高く、●●○、●○○、○○○、○○○●、○○○●の各型には低く接続する。しかし、三拍名詞の中の残る一つの型○○●●型への接続が問題となるのである。助詞「の」アクセントの性格として一般に知られていることは、「直前の拍と同じ高さに接続する。ただし、○○●、○○○●など、最終拍のみ高い型には低く接続する」ということである。この原則がすべての型にあてはまれば問題はないのであるが、○○●●、○○●●型という型では、この原則にあてはまらない、つまり、これらの型に低く接続する例が見出されるのである。ここではまず、○○●●、○○○●型に助詞「の」が接続した例を示し、次にそれらの例を検討し、これらの型に対する「の」接続の仕方について考えることにする。

桜井茂治氏は、「助詞「の」アクセント」⁽¹⁾の中でこの問題について触れられ、「平上上型、平平上上型のごとき型にたいしてはたして「の」は高くつくか」に対して「高くつく」と答えることができると思う」と結論された。しかし、桜井氏が平上上型名詞への接続例としてあげているのは次の一例のみであり、平平上上型への接続例はあげられていない。

比志利乃美加止乃 平上上上上上上上〔頼聖帝〕一五二頁1行
この例は『日本紀私記』丙本のものである。⁽²⁾ところが「比志利

乃」の部分は、影印本では平上○○○となっており、水戸彰考館蔵の原本でもやはり平上○○○の声点注記である。ゆえに右の例は○○●●型に助詞「の」が高く接続した例とは見なしえないわけであり、当然のことながら、この一例から○○●●、○○○●●型に対して助詞「の」が高く接続すると結論することもできなくなる。⁽³⁾

では、これらの型に対して助詞「の」はどのようにに接続したのだろうか。以下に平上上および平平上上の型に助詞「の」が接続している例をあげ、問題点の検討をおこなう。⁽⁴⁾

I 平上上上の

(1)「の」に上声点が注記されている例(挙例の下に所収文献名、巻数、丁数(頁数)、行数を記す)

- 1 布那斗能加微 平上上上平平〔岐神〕弘安本紀卷一・三〇頁・5行線点／乾元本紀卷一・七〇頁・5行圈点
- 2 泥土漏能 平上上上〔根白〕前田本紀一一・222
- 3 伊麻紀能 平上上上〔今城〕兼右本紀二六・七オ・4線点
- 4 布奈止乃神 平上上上〇〔岐神〕御巫本私記六オ・7
- 5 比多利乃 平上上上〔左〕同一〇ウ・3
- 6 非太里乃 平上上上〔左〕同一〇ウ・4
- 7 末古止乃 平上上上〔誠〕同二五ウ・6
- 8 ツクミノイヒワ⁽⁵⁾ 平上上上平平平〔白莫〕観智院本名義抄僧上二ウ・3

9 ヒサコノサネ 平上上上平平〔瓢〕観智院本名義抄僧中四オ・5／鎮国守国神社本名義抄下二・一一七オ・4

10 ヲシロノウマ 平上上上平平〔賑〕観智院本名義抄僧中五

五オ・1 鎮国守国神社本名義抄下二・七九オ・5

11 イツレノ 十斗斗斗〔何〕四座講式・大涅槃一九・1

12 あふこの 平上上上〔洽子〕古今訓107〔人名〕

13 かふこの 平上上上〔飼蚕〕古今伏片・家・頭府 仮名序

14 なからののはし 平上上上〇〇〔長柄〕古今訓 仮名序・1015

(2) 「の」に平声点が注記されている例

1 娑佐羅能 平上上上〔細紋〕前田本紀一七・127 圖書寮本

紀一七・23 圈点 兼右本紀一七・一〇ウ・6 線点

2 ヲ士漏能 平上上上〔根白〕北野本紀一・二〇ウ・6 線

点 兼右本紀一・一七ウ・7 線点 ※「々」は「泥」の

踊り字

3 ヲクミノイヒネ 平上上上平上上〔白莫〕鎮国守国神社本

名義抄下一・四オ・5

II 平上上上十の

(1) 「の」に上声点が注記されている例

1 於朋枳瀾能 平上上上上〔大君〕岩崎本紀二二・292 圈点 圖書寮本紀二二・301 北野本紀二二・二四オ・4 兼右本

紀二二・二〇ウ・7 線点

2 於朋枳美能 平上上上〔大君〕前田本紀一七・126

3 於朋枳美能 平上上上上〔大君〕兼右本紀一七・一〇

ウ・5

4 於朋著瀾能 平上上上上〔大君〕圖書寮本紀二二・292 北

野本紀二二・二三ウ・2

5 於真枳瀾能 平上上上上〔大君〕圖書寮本紀一六・21 兼

右本紀一六・三オ・4 線点 同一六・二ウ・4 線点

6 多那須衛能 平上上上上〔手端〕弘安本紀一・五七・2 乾元本紀一・128・2

7 阿良波爾何 平上上上上〔顯露乃〕乾元本紀〔所引私記〕

二・232・2 圈点

8 加良久爾乃 平上上上上〔韓郷〕御巫本私記一七オ・5

9 宇治由布乃 平上上上上〔内木綿之〕丙本私記一三四・2

10 かむさしの 平上上上上〔簪〕古今高貞・毘873。

11 はるみちの 平上上上上〔春道〕古今訓303〔人名〕

12 いつはりの 平上上上上〔偽〕古今伏片・家 仮名序

13 きちかうのはな 平上上上上〇〇〔桔梗花〕古今 伏片・

家440題

14 しきたへの 平上上上上〔敷妙〕古今高貞・毘504

15 よどかはの 平上上上上〔淀川〕古今訓721

(2) 「の」に平声点が注記されている例

1 於朋著瀾能 平上上上上〔大君〕岩崎本紀二二・284 兼右

本紀二二・二〇オ・6 線点

2 和斯里底能 平上上上上〔走出〕前田本紀一四・155 圖書

寮本紀一四・181 圈点 兼右本紀一四・一三オ・1 線点

3 之多太瀾能 平上上上上〔細螺〕北野本紀三・一五ウ・1

線点 兼右本紀三・一三オ・3 線点

4 オホヒネノ 平平上上平〔大兄〕前田本紀一・226線点
5 タマカキノ 平平上上平〔玉牆〕兼右本紀三・二三オ・7

線点

6 太末加岐乃 平平上上平〔玉牆〕丙本私記134・5

7 布刀麻尔乃〔太占乃〕乾元本紀所引私記二233・1圈点

8 於保須三乃三古止 平平上上上上上〔大角命〕御巫本私

記一五オ4

以上が平上上、平平上上型に「の」が接続した例である。右の例の中には資料によって声点の異同があるものもあり、単純にすべての例が○●●、○○●●型に「の」が接続したものとは見なしえない。

まず、同一語に接続したにもかかわらず、助詞「の」そのものが上声点と平声点の二様の注記をもつ語として「根白（ねしろ）」「鶉（つぐみ）」「大君（おほきみ）」の三語がある。「根白」の場合、「白」のアクセントが○●と推定されており、「根白」も○●●であったとも考えられるが、前田本では「の」に上声点が注記されており、これが誤点でない限り「根白」のアクセントは○●●であったとみるべきだろう。次に「大君」であるが、「の」が高く接続している例が一例、低く接続している例が二例と、圧倒的に高く接続している例が多い。平声点が注記されている二例はあるいは誤点かと疑いたくなるが、二例のうち一例は書写が最も古く、声点の位置についても最も信頼の置ける岩崎本の例である。よって誤点とは考えられず、「大君」に対しては「の」は高

く接続する方が優勢であるが、低く接続することもあり、ゆれている状態であったと見るべきものであると思われる。一般に、接続語「大（おほ）」のついた語の複合度は弱く、そのアクセントは○○…となることが多い。このことが助詞「の」の接続のゆれの原因となったものと思われる。なお、図書寮本一六・29、兼右本一六・三オ・4では「大君」に平上上上の声点が注記されている。これは複合が強くなった形であろうか。「鶉」に接続する「の」がゆれているのは疑問である。観智院本と鎮国守国神社本の声点の関係をはっきりさせる必要がある。

次に「の」が接続している語に声点の異同があるものについて考える。まず、「細螺（しただみ）」であるが、北野本、兼右本ともに平平上上の注記をもつ例が二例ずつあり、あるいは「細螺」のアクセントは○○○●●であったのかもしれない。⁶○○○●●型であれば「の」が低く接続するのは当然ということになる。「玉牆（たまかき）」は北野本の傍訓の片仮名に注記された声点では平平上上となっている。しかし、兼右本、御巫本私記の平平上上をとともに誤点と考えることはできないので○○○●●に「の」が接続した例と考えておく。このほか、古今集の「簪（かむざし）」「春道（はるみち）」の二例も諸本で異同が見られる。

このほかにも平上上、平平上上の声点が○●●、○○○●●型を表している例が含まれている可能性なども考えられる。

以上のように、右の平上上、平平上上のすべてが○●●、○○○●●型であるとは見なしえなくなるが、○●●、○○○●●型に助

詞「の」が低く接続した例が存在することは確かであるといえるだろう。以上の例を検討した結果、助詞「の」の○○●●、○○●●型への接続は、高く接続する場合と、低く接続する場合の両様であり、接続はゆれてゐる状態であつたと結論せざるをえない。

五拍語・六拍語では○○○○●●、○○○○○○●●などの型に所属する語が少ないこともあり、「の」の接続する例を見出すことができなかった。なお、○○○○●●型に「の」が接続した例として次のものがある。

於保比屢眸能武智 平平上上上上上上（大日靈貴）弘安本紀

一・一五・二右線点／乾元本紀一・三七・二右圈点

また、○○●●型に接続した例としては次の一例がある。

和加比留米乃美古度 平上上上上上上上（稚日女尊）御巫

本私記一二ウ・一

具体例が少ないので結論を引き出すことは難しいが、御巫本私記の例は○○○○●●、○○○○●●型などに「の」が低く接続した可能性もあることを窺わせるものである。

以上、諸例の検討の結果、助詞「の」は○○○○など最後の一拍のみ高い型以外に、○○●●、○○○○●●型などにも低く接続する場合があることが明らかとなった。

三、接続面で問題のある語

二拍名詞の第一類から第五類、三拍以上の名詞についての助詞

「の」の接続の仕方は先に述べたとおりであるが、一拍名詞および上昇調拍を含む型の語には、助詞「の」は高く接続するのであるうか、それとも低く接続するのであるうか。実例を挙げて考えることにする。

まず、上昇調拍のあとの「の」の例をあげる。

避能伊陀圖鳥 去平平平平上（檜の板戸を）前田本紀一七・

113／図書寮本紀一七・7圈点／兼右本紀一七・九ウ・5線

点（「陀圖」に上声点も注記）

スノコ 去平上（簀子）観智院本名義抄僧上三七オ・5／鎮

国守国神社本名義抄下一・一六オ・3

右の例中の「ひ（檜）」、「す（簀）」のアクセントはともに上昇調であつたと考えられる。「の」には平声点が注記されているので、助詞「の」は上昇調一拍語には低く接続すると、一応はそのように考えられるだろう。二拍名詞第四類（○○●●）に対して低く接続したことを考えると、右の推定はおそらく正しいだろう。このように和語の場合には「の」は低く接続すると考えられるが、二拍名詞第四類の場合と同じく漢語の場合は高く接続するものと考えられる。名義抄より例をあげる。

チノヤマヒ 去上平上平（痔）観智院本法下六二ウ・7

シノヤマヒ 去上○○○（痔）観智院本法下六二ウ・7

以上の例から、助詞「の」は一拍名詞上昇調の語には、和語では低く、漢語では高く接続すると考えられる。これは、二拍名詞第四類と平行する現象であり、実例は少ないものの、右のように

考えてよいだろう。⁽⁸⁾

次に、二拍名詞第一類から第五類の中に属さない型には「の」はどのように接続するのかを考えることにする。アクセントの型として○●、●●、○●●などの型が考えられるが、●●●型は当然低く接続すると考えられるので問題とならず、○●型は型そのものが存在した可能性が小さいので、「の」の接続については検討を要しないだろう。ただし、もしこの型の語が存在し、それに「の」が接続したとしたら低く接続した可能性が高いと考えられる。残る●●型に助詞の「が」が接続した例として次の一例がある。

ヘミノモヌケ 去上上平平平「虬蛭」鎮国守国神社本妙義抄
下二一〇四オ・4

一例だけであるが「の」は●●型には高く接続したと考えて問題はないだろう。

助詞「の」が二拍名詞第四類(○●●)に低く接続することは多くの例からみて動かないところである。ところが次の例では○●型の語に対して助詞「の」は高く接続しているのである。

奈尔能都底拳騰 平上上上上上上「何の伝言」兼右本記二

七・二四オ・4線点／北野本紀二七・二九オ・1

なのに 平上上「何」古今高貞・毘1007

いつの 平上上「何時」古今伏片45

かいの 平上上「楫」古今高貞・毘863

イッノ 十斗斗「幾」四座講式・永舎二2

モ(ッ)テノ 十斗斗「以」四座講式・大涅一六8／同保遣
五6

マナコノ 十斗斗「眼」四座講式・正羅九5

右に挙げた例はすべて和語に助詞「の」が接続した例であり、和語の○●●、○●●型には「の」は低く接続するという原則の例外となっている。不定の代名詞「なに」「いつ」、そして「もって」は普通名詞と異なり、漢語＋「の」の場合と同じく「の」は高く接続したものと考えられる。このような語はほかにも存在する可能性がある。「まなこ」は疑問の例である。この語は『四座講式』の時代でも○●●のアクセントをもつ一語の普通名詞と考えられ、「ま(目)＋な＋こ」という語源意識はおそらく存在しなかっただろう。「の」は低く接続するのが当然と考えられるが、『四座講式』では「斗」の譜が注記されており、「の」は高く接続していると考えられる。このような例が一例しか存在しないこともあり、ここでは一応例外としておく。⁽⁹⁾

四、助詞「の」のアクセントの性格

平安時代末期から鎌倉時代における助詞「の」の性格は、一般に次のように考えられてきた。

助詞「の」は直前の拍と同じ高さで接続しようとする。ただし、和語の場合は○●●、○●●●など最後の拍だけが低い型には低く接続する。

ところが以上の検討により、○●●●、○●●●●型といった後ろの

二拍が高い型にも低く接続する例がある。さらに、○●型の中でも「なに」「いつ」などの語には「の」が低く接続している例が存在する。よって、助詞「の」のアクセントの性格は、今まで考えられてきたような単純で、きれいな形の規則で説明することはできなくなる。それではなぜそのような例外的な声点注記が存在するのであるか。まず、○●●●、○●●●●などの型に低く接続する例と高く接続する例があることから考えることにする。

助詞「の」が○●●、○●●●型に低く接続した理由について金田一春彦氏は次のように記している。¹⁰⁾

……当時の国語アクセントで、○●●●とか○●●●●とか○●●●●とかいう形、つまり、前の部分の二拍以上が低で、後の方の二拍以上が高である型は一語のアクセントの型としてはさらわれたのだ。：（中略）：おそらく、そういう型は二語の連続という印象を与えた。そのために、「が」「を」「に」「は」というような一般の助詞がつく場合にはそういう型も許された。が、「の」の場合には接続が一語のように意識されたので、例えば、三拍名詞の○●●●●については（十斗斗）というような型はとりえず、（十斗斗）型になったものと見られる。四拍以上の名詞についた場合も同様である。二拍名詞の場合には○●●●型になるわけで、それだけでは必ずしも支障はなかったが、三拍以上の名詞の同種類の型には「の」がいつも低くついたので、二拍語の場合も、それに同調して低くついているのであらうと思われる。

以上の点をまとめて、金田一氏は助詞「の」の性格を「名詞となるべく一語になろうとする傾向をもつ助詞」とであると記している。そこで、○●●●、○●●●●型に「の」が高くも低くも接続するという問題にもどるが、これらの型に「の」が高く接続すると○●●●●、○●●●●となり、低く接続すると○●●●●、○●●●●となる。この場合、前者と後者ではどちらがより一般的なアクセント型であるか簡単には決められない。必ずしも一方が安定多数型ではないのである。¹¹⁾よって、○●●●●、○●●●●型に助詞「の」が接続する場合、高く接続したりというゆれが生じたのだらう。さて、右の問題とは別に、「なに」「いつ」などは、○●●型であるにもかかわらず、「の」が高く接続するという問題がある。これらの語の場合、普通名詞＋「の」の場合ほど一語としての意識が強くなかったので、漢語＋「の」と同じように、「の」が高く接続したものと考えた。ところで、室町時代のアクセント資料である「補忘記」では次のような例がみられる（節博士は貞享版のものを示す。補読はひらがなで表示する）。

いまノふんハ〔今文〕貞三・五／元二四・四〔角徴角角角○〕
おくノまきニ〔奥巻〕貞一九・二／元五七・五〔角徴徴徴徴

徴〕

おくノそ〔「奥疏」貞一九・二／元五七・五〔角徴徴徴〕

なノノくるシミカあらシ〔「有何苦」貞二九・二／元七七・七

九・三〔角徴徴徴徴徴角角角角〕

ヒノオノクけつ〔「檜尾口決」貞五六・五／元一四七・三〔角

徴角角角角※「決」に「角」譜

和語でも「奥の」「何の」などは「角徴徴」の譜が付されてお
り、○●の語に「の」が高く接続している。ただし、二拍名詞第
四類一般に対して「の」がどのように接続したかは不明である。

室町時代以降のアクセント資料の一つである平曲譜本では「の」
はどのようなアクセントをもっているのだろうか。奥村三雄氏は
『平曲譜本の研究』(四四〇頁)で次のように記している。

また舟類(2n3)に関しては、「ガ」「デ」など甲1類助詞
何れも高く付くのに対し、「ノ」だけが低く付く点、現在京都
と異なるが、これも結局《舟ノ》という文節が一語的な性格を有
していた為、舟ガ、舟ニなどの○●型と関係なく、伝統的な
○●型を保った」とも見られる。

平曲譜本では四類の語に対しては「の」は低く接続していたわけ
だが、例外として○●型に高く接続する語も存在する。奥村氏は
「何(なん)の」「淵の」「空の」「松の」をあげておられ、これら
の例外について「近代京都語的な変化の早い例と言えようか。尤
も、左記「何の」例は、第二拍が不完全拍である為の変容形とも
見られるし、また「空の・松の」の例は、その譜記解釈に問題が
残るかもしれない」と述べておられる。

現代京都において「の」が二拍名詞第四類に高く接続するよう
になった理由としては、「が・て・に・は」などの助詞への類推
のほかに、漢語の場合はもとより○●型に「の」が高く接続して
いたことが考えられる。多くの語彙をもつ漢語のアクセントが和

語のアクセントに影響を与えたことは十分に考えられることであ
る。それともう一つには、和語の中にも「何(なに)」「何時(い
つ)」のように平安・鎌倉時代からすでに「の」が高く接続する
語が存在していたことが考えられよう。⁽¹²⁾一方では漢語のアクセ
ントの影響により、もう一方では和語内部に助詞「の」が高く接
続する語を含んでいたために、和語の○●型にも助詞「の」は高く
接続するようになったものと考えられる。また、室町期におこっ
たアクセントの体系変化により、○●●、○○●●などの型が消
失したために、最後の一拍が高い型には低く接続するという規則
が弱められたことも考えられよう。

『日本書紀』声点本、図書寮本『類聚名義抄』など、平安時代
の声点資料では、ほとんどの助詞がアクセントの上では独立性を
保っており、固有のアクセント型をもっているのに対し、「の」
は固有のアクセントをもっていなかった。しかし、「の」も本来
は固有のアクセントをもっていた可能性は大きい。現存する声点
資料を中心とするアクセント資料からは、助詞「の」の本来のア
クセントを推定することは困難である。ところが、近年高山倫明
氏の研究により、『日本書紀』歌謡の音仮名が奈良時代のアクセ
ント資料となるものであることが明らかにされた。⁽¹³⁾そこで、『日
本書紀』歌謡の音仮名では、助詞「の」がどのように表記されて
いるかをみてみると、そのほとんどが「能」で表記されている。⁽¹⁴⁾

「能」字の漢字原音声調は平声と上声の二声調があるが、平声が
一般的声調であると考えられ、「能」字の原音声調によって日本

語のアクセントを示すとすれば当然平声によって低平調を標示したものと考えられる。『日本書紀』歌謡の音仮名の中で特に、日本的な漢字音を含まない、唐代北方音を背景に成り立っているという⁽¹⁵⁾α群の巻では助詞「の」はすべて「能」と表記されている。

α群の仮名の原音声調がすべて日本語のアクセントを反映するように使用されていたとしたら、助詞「の」は低平調の固有のアクセントをもっていたことになる。しかし、『日本書紀』において「の」を表す万葉仮名はほとんどが「能」であり、巻一を中心にわずかに「迺」が見えるのみである。よって「の」のアクセントにたとえ高平調・低平調の両様があるとしても、それを標示しわけることができないことになる。α群の「能」字のすべてが日本語の低平調アクセントを標示しているとはみなせないのである。また、もし助詞「の」が常に低平調で発音されたならば、平安時代の声点資料において●●、●●●型などに「の」が低く接続した例が残っていてもよさそうであるが、そのような例はまったく見当たらない。しかし、助詞の「の」が奈良時代あるいはそれ以前の時代において（低平調という）固有のアクセントをもっていた可能性は存するわけであり、その検討を続けることは無意味なことではないだろう。

五、おわりに

助詞の「の」は○●、○○●など最後の拍のみが高い型には低く接続するのを除くと、直前の拍と同じ高さに接続すると考えら

れてきた。○●●、○○●●型に対しては、桜井茂治氏に、高く接続する、という説があったが、実例を検討してみたところ、高く接続する例、低く接続する例ともに存在することが明らかとなった。これは、文節全体で一語になろうとする助詞「の」の性格によるものと考えられる。以上のほかに、助詞「の」が一拍名詞の上昇調の語に低く接続すること、○●型でも「何(なに)」「何時(いつ)」などの語には低く接続すること、現代京都では和語の○●型にも高く接続するようになるが、それは他の助詞への類推以外に、漢語に接続する場合の影響、「何(なに)」「何時(いつ)」など和語にも漢語と同じく「の」が低く接続する語があったことによると推定されることなどを述べた。そのほかに、奈良時代以前には助詞「の」は低平調という固有のアクセント型をもっていた可能性があることを述べた。

これまでのアクセント研究において、いまだ十分に検討されていなかった部分を中心に、『日本書紀』声点本の声点を中心として実例をあげて問題点を検討した。『日本書紀』歌謡音仮名の原音声調による推定などは、今後の研究の進展をまつべきところが多いが、助詞「の」のアクセントの接続面での問題点をささやながら明らかにしえたと思う。

注(1) 桜井茂治「助詞「の」のアクセント」『国学院雑誌』61

— 4 『中世国語アクセント史論考』一九七六年六月 桜楓社 に再録)

(2) 『日本紀私記』丙本の声点は、一九八四年七月、早稲田大学文学部助手(当時)の上野和昭氏と共に原本と声点の

照合を行った。

- (3) 秋永一枝氏『古今和歌集声点本の研究 研究編上』一九八〇年二月 校倉書房 一三四頁)によれば、「聖(ひじり)」は、観智院本名義抄に上上平、平上平の両様、高山寺本名義抄、古今顯平に平上平の声点注記がみられ、それは「連濁して語源が不明となり、「日知り(上上平)」「火知り(平上平)」両説が行われたことも考えられる」からという。「ひじり」のアクセントが●●○、○●○のいずれであれ、その場合は「の」は低く接続することになる。

- (4) 用例は左記の複製・索引類により調査した。

弘安本紀……『国宝部兼方自筆日本書紀神代卷』(一九七一年一月 法蔵館)

乾元本紀……『古代史籍集』(天理図書館善本叢書1)一九七二年七月 八木書店。原本により声点

の照合をおこなった。

岩崎本紀……『復刻日本古典文学館』(一九七二年一月 日本古典文学会)

前田本紀……『秘籍大観日本書紀』(一九二六年五月 二月 大阪毎日新聞社)

図書寮本紀……『同右』

北野本紀……『国宝北野本日本書紀』(一九四一年四月 二月(貴重図書複製会))

兼右本紀……『日本書紀兼右本一』『同二』『同三』(天理図書館善本叢書54~56)一九八三年5~9月 八木書店)

図書寮本名義抄……『図書寮本類聚名義抄 本文篇』(一九七六年一月 勉誠社)

観智院本名義抄……『類聚名義抄 観智院本 仏』『同法』『同僧』(天理図書館善本叢書32~

34 一九七六年6~11月 八木書店)

鎮国守国神社本名義抄……『鎮国守国神社蔵本 三宝類聚

名義抄』(一九八六年一月 勉誠社)

御巫本日本書記私記……『古事記 日本書紀(下)』(神宮古典籍影印叢刊二)一九八二年四月 八木

書店)

丙本日本紀私記……『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』(新訂増補国史大系第八卷)一九三二年二月

吉川弘文館)

補志記……『元禄版 補志記』(一九六二年五月 白帝社)

望月郁子『類聚名義抄四種声点付和訓集成』(一九七四年三月 笠間書院)

金田一春彦『四座講式の研究』(一九六四年三月 三省堂)

秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 索引篇』(一九七四年三月 校倉書房)

上野和昭編『御巫本日本書記私記声点付和訓索引』(一九八四年四月 アクセント史資料研究会)

桜井茂治『新義真言宗伝補志記の国語学的研究』(一九七七年三月 桜楓社)

(5) 左記文献による。

金田一春彦『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(一九七四年三月 壇書房)

(6) 観智院本・鎮国守国神社本『類聚名義抄』に左記のように

に平上平上の声点が注記されている。

シタ、ミノフタ 平上平上○○○〔玉蓋〕 観智院本僧中

九オ・7

シタ、ミノフタ 平上平上平○○○〔玉蓋〕 鎮国守国神社

本下一・五一ウ・3

(7) 「かむさし」は「高貞」「毘」が平上上上、「寂」が平上

上平、「はるみち」は「高貞」「毘」が平上平上、「訓」が

平平上上、また「毘」は平平上平の例もある。

- (8) 漢語の上昇調一拍語に「の」が高く付くことはすでに奥村三雄氏の左記文献中に記されている。

奥村三雄『平曲譜本の研究』(一九八一年五月 桜楓社) 四三九頁

- (9) 『四座講式』の「いつ」の例について、金田一春彦氏はこの語に「の」が高く接続する点が不審であるとし、「これはいくつという語のつまつた形で、「何時」とは無関係の語であらう」とされたが、他の諸例より、『四座講式』の「いつ」を「何時」とみてもよいだろう。また金田一春彦氏は助詞「の」が高く接続している例について、「マナコノ・ウクルラノの例は、正平本・天正本以下の譜本の墨譜の後代性を示すものと考える」と述べておられる(『四座講式の研究』一九六四年三月 三省堂 四三八頁)。しかし、平安鎌倉時代の声点資料の「なに」「いつ」の例は後代の例とは見ることはできない。

- (10) 金田一春彦『四座講式の研究』(前掲) 四三八頁。

- (11) 平安時代末期・鎌倉時代においては、後ろから二拍目に核がある型の所属語彙が多く、安定型と考えられる。安定型については左記文献を参照されたい。

桜井茂治「平安院政時代における複合名詞のアクセント法則——五音節語を中心として——」(『国語学』33 一九五八年六月『古代国語アクセント論考』 一九七五年九月 桜楓社 に再録)

- (12) 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究 研究篇上』(前掲) 研究 研究編上』(前掲) 六三頁で記されている。さらに秋永氏は○●型に「の」が高く接続するようになる理由として「なに」のように母音が落ちて用いられ易い語、「かい」のような狭母音だけの語は、複合の度合が強くなるとその

部分だけを強く発音するのは発音の不経済であることと関係するかもしれない」と記している。

- (13) 高山倫明「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」(『語文研究』51 一九八一年六月)

- (14) 左記文献中の「日本書紀歌謡及び訓注語彙総索引」を利用した。

大野晋『上代仮名遣の研究』(一九五三年六月 岩波書店)

- (15) 森博達「『日本書紀』歌謡における万葉仮名表記の一特質——漢字原音より観た書紀区分論——」(『文学』45—2 一九七七年二月)